

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

vol.19 2023年4月28日発行

巻頭言

『ポストコロナに向けて』

長田真弥（国際リハビリテーション研究会事務局、
姉ヶ崎ケアセンター）

〔巻頭言〕

『ポストコロナに向けて』
長田真弥

〔特集①〕

『災害支援のすすめ』
古郡恵

〔特集②〕

『トルコ派遣レポート』
水家健太郎

〔連載〕

『山口高橋の研究万華鏡』
『シリーズ論文を書く②』
～アウトプットで思考を整理する～』
高橋恵里

〔コラム〕

『世界のめがね』
『パキスタンの街角で』
大西海斗

〔お知らせ〕

私は2021年10月からニュースレターの編集委員として国際リハビリテーション研究会の活動に参加しています。JICA海外協力隊（旧、青年海外協力隊）の活動を終え2019年に帰国した後、どのように国際協力に関われるか途方に暮れていた時に声をかけて頂きとても感謝しています。

さて、新型コロナウイルスの感染状況が日に日に変化しており、今年5月8日には感染症の分類を2類相当から5類（季節性インフルエンザと同等）へ変更になると発表されました。いよいよポストコロナの社会が見えてきました。私が働いている介護老人保健施設では、中断していた入所者と家族の面会や実習生の受け入れなど、この3年間で中断していた業務を再開する動きが始まっています。もちろん、基本的な感染対策を行った上での業務になるのでコロナ以前とは異なった働き方になります。このような転換期では、過去に戻るのではなくICTを活用して更に働きやすく、より良い社会になっていけば良いと感じています。

海外に目を向けると、アメリカや欧米諸国ではオンライン診療や遠隔医療などICTを活用した医療が更に進歩したと言われています。日本ではやや導入が遅れていますが、これらの技術が進めば国際協力の分野でも可能な支援が増えていくのではないかと考えています。

今年度は国際リハ研究会の皆様にとって良い方向へ変化の年になれば幸いです。

本号の特集

本号では、災害支援の現場で広く活動されているお二人にご執筆いただきました。これまでの経験や現地の様子など、なかなか知ることのできない“リアル”をお届けします！

特集①：災害支援のすすめ

氏家記念こどもクリニック 作業療法士 古郡恵

日本は、その位置、地形、地質、気象などの自然的条件から、台風、豪雨、豪雪、洪水、土砂災害、地震、津波、火山噴火などによる災害が発生しやすい国土となっていると言われています。世界全体に占める日本の災害発生割合は、マグニチュード6以上の地震回数20.8%、活火山数7.0%、世界の0.25%の国土面積に比して、非常に高くなっているのがわかります。（内閣府防災情報のページより）

パキスタン北部地震（2005年）から17年、東日本大震災から12年、今でこそ「災害リハビリテーション」という言葉が聞かれ、日本災害リハビリテーション支援協会（JRAT）が組織され活動が行われていますが、当時は、「災害にリハビリテーションが関わることがあるの？」「災害時にリハ職は何ができるの？」とよく聞かれました。

かくゆう私自身、最初から災害支援に関心があるわけではありませんでした。協力隊でパキスタンに派遣中に、パキスタン北部地震が起きたことがきっかけでした。首都の医科学研究所にあるこども病院で活動している薬剤師隊員から、「病院が被災地から運ばれてくるケガをした被災者であふれかえっている。手伝いに来られる人は来てください」という呼びかけでした。こども病院には泥だらけで手当が十分にされていない骨折、切断、脊髄損傷等の子ども達が、病棟からあふれロビー・廊下と横になっていました。術後に必要なリハビリは受けておらず、院内のリハ科スタッフは受け入れの手伝いで不在でした。被災地から運ばれてくる方々を受け入れるために、処置が終わると子ども達は病院から出されていました。あまりにも衝撃的な光景で、災害時だから仕方ないよねとどうしても思えませんでした。災害時にリハビリテーションの支援は必要だと強く感じました。



【こども病院に入院してる子ども達】

私が所属しているJOCVリハビリテーションネットワークでは、福島県二本松市にある2カ所の仮設住宅でマッサージと作業活動（月2回）を6年5カ月間行いました。住民の方々と話しながら活動を決めたり、住民の方々が自主的にお針子クラブをつくり平日に集まったり、支援が終わった後も活動を続けていました。地域リハとは異なる、地域開発の視点での関わりもリハ職は行うことができます。2018年は北海道胆振東部地震が起こり、全道が数日停電し、流通が止まりコンビニやスーパーでは食料品がしばらくありませんでした。そんな中、北海道JRATとして被災地で活動をしました。避難所にいる方々の生活不活発病やDVT予防のために支援活動を行いました。JMAT(日本医師会災害医療チーム)の傘下での活動だったのでJMATの撤退に合わせて2週間で活動が終了になったのが課題です。

災害が起きたときに、何かしたいが何をしてもよいかわからない場合、災害支援の記事を読み、災害支援を経験した人のお話を聞いてみてください。何か特別なスキルや知識が必要なわけではありません。一歩踏み出して現場を見てみて下さい。現場をみたら躊躇や迷いはなくなると思います。被災地に単独で行くことはお勧めしません。所属している団体の募集に応募してそこから派遣されるのが一番確実な方法で、被災地に負担をかけません。募金をするということも大切なことです。冒頭のデータが示しているように、日本にいる限り明日は我が身です。

特集②：トルコ派遣レポート



国際緊急援助隊医療チーム 理学療法士 水家健太郎

災害に対する感度が上がったのか、単に今回のトルコ地震の注目度が高かっただけなのか。前回のモザンビークへの派遣の際には、「えっ、そんな災害があったの?」と募集がかかった時に思いましたが、今回は募集がかかる前から体が動いていました。

コロナ禍にも様々な災害がありましたが、国際緊急援助隊(以下、JDR)医療チームの派遣は実に4年ぶりでした。派遣がない間は、チームのソフト面とハード面を毎年毎年ブラッシュアップしてきましたが、その一つの目玉としてリハビリテーション部門の整備がありました。約1年半かけて作り上げてきたリハビリテーション部門の初めての実践をトルコで行い、災害時のリハビリテーションの重要性を肌で感じてきました。



【写真提供：JICA】

JDR医療チームでは外国での災害に対して、日本から持って行った野外病院を立ち上げ、そこで診療するわけなので、リハビリテーション専門職(リハ職)の役割は日本の病院での臨床とほぼ同じです。医師からの処方が出た患者に個別にリハビリテーション治療を行います。違うのは、そこが外国であり被災地である、という点です。

「日本の災害リハ」では個別リハはタブー視され、代わりに環境を変えたり、他の支援に繋がったり、集団リハを行ったりというアプローチを行います。日本では避難所支援が中心で、一方のJDR医療チームでは病院支援や現地医療の代替が使命となるので、リハ職の役割が異なるのは当然なのですが、そういう所を認知してもらおう努力をしている所ですので、前置きが長くなりました。



【写真提供：JICA】

2023/2/6の現地時間早朝M7.8の地震が起きました。JDR医療チームは震源地近くのカジアンテップという街で診療を開始しました。入院、手術、透析ができる野外病院を立ち上げ、外来患者や入院患者に対してリハビリテーション治療を実施しました。現地の被災した病院を支援する形で患者を受け入れたので、災害関連疾患だけでなく、感染症や非感染性疾患(NCD)、災害とは関係のない怪我や事故の方も診療しました。

リハビリテーション治療の特性上、患者に触れる時間が長いので、それだけで安心感を与えたり満足度を上げたりという効果があったと思います。また、診察場面では引き出すことができなかつた様々な不安や悩みを聞く場面があり、心理的応急処置(PFA)などの心理社会的ケアについても学んでおくことが大事だと感じました。

JDR医療チームで活動するために知っておかなければならない事も多々ありますが、それは導入研修や中級研修でしっかり学べます。今回トルコには理学療法士が計4名派遣されましたが、今後もJDR医療チームが派遣される際にはリハ職が必要になります。登録者数が少なく、新たな登録をお待ちしていますので、是非ご検討ください。

[連載]

山口高橋の

研究万華鏡*

『シリーズ論文を書く② アウトプットで思考を整理する』

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」
という声にお応えし、気まぐれに研究について綴ります。

前回に引き続き論文執筆について書きます。論文は、研究によって明らかになったことを世の中に伝える手段です。研究を行うと、明らかになったことや伝えたいことがたくさん出てきます。読み手が伝えたいことを理解して納得できるように、私たちは論文を整えて書く必要があります。

論文の構成と内容およびポイント¹⁾は次の通りです。【背景】着想を既存文献に照らして整理し、検証可能な論点に絞り込む【方法】方法を明確に示し、再現性を確保する【結果】得られたデータから、伝えたいことがうまく伝わるよう図表を工夫して記載する【考察】結果を既存論文の中に位置づけ、論理的に整合性のある考察を示す。

このような構成の論文を書くときに役立つのは、『人と話す』というアウトプットです。誰かに自分の研究の意義・目的・結果・他の研究との比較などを話していると、相手は興味を持ったことや分からないことをいろいろと尋ねてくれるでしょう。カジュアルな質疑応答を繰り返しているうちに、自分が伝えたいと思っていたことや重要なポイントが分かってくるものです。相手が理解しにくいポイントが分かれば、その説明を工夫することもできます。誰かと話をした後、作業がぐんと進む経験をしたことがある方もいるでしょう。論文執筆は孤独な作業に思えますが、共著者のみならず周りの人と話すことで自分の思考を整理していくと、とても想像的な作業になると思います。

1) 小山哲男; 論文執筆のコツ. 日歯麻誌.2022, 50(1), 14-18

(国際リハビリテーション研究会事務局、福島県立医科大学 高橋恵里)

「コラム」 『世界のめがね』

大西 海斗

(国際リハビリテーション研究会事務局、
株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング)

パキスタン・イスラム共和国 [パキスタンの街角で]

世界中で活躍を展開している
会員のめがねを通した
世界の姿を各号お届けします。
今回は、**パキスタン**からです。



南部シンド州の病院前に並ぶバイク。このあたりも洪水によって浸水した場所。水が引き、整備されるまでには大変な苦労があったそう。

パキスタンは人口2.2億人を超え、人口世界第5位の大国です。皆さんもよくご存知の通り、四大文明のひとつ「インダス文明」発祥の地でもあります▼そんなパキスタンの北部イスラマバードから南部シンド州まで、多くの医療機関や保健省、大学などでお話を伺いました。「大きな川が流れ、雨の多い地域だから水にも慣れ、建物も底上げしたり工夫している所も多い。それでも、今回の被害はとても大きかった。」2022年8月のモンスーンの影響による大雨と大洪水は、甚大な影響を与え、インフラ整備に加え、飲料水の確保やマラリア、下痢、栄養不良対策など、緊急支援のみならず、今もなお中長期的な支援や復興が求められています▼そして、その現場では「よそ者」が簡単に言葉では表すことのできない、1人ひとりの暮らしがあることを思い知らされます▼今回の学び・調査の中心は保健医療分野のハード/ソフト面からの切り口が中心でしたが、環境問題や人口構造の変化、そしてビジネス展開など、さらに視野と経験を広げ、深めていきたいと感じました▼街は若者*の活気に溢れています。農業・IT・イスラム市場等、インダス文明が栄えたこの地のエネルギーとこれからの発展に要注目です。

※平均年齢22歳

【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2023・第6回通常総会開催】

日程：2023年6月18日（日） 方法：オンライン開催

総会の成立にあたっては、会員の皆様の出席または委任状の提出が必要です。

詳細は追ってホームページ、メーリングリスト等でご連絡いたします。

【国際リハビリテーション研究会第7回学術大会】

日程：2023年11月19日（日） テーマ：知る・気づく・考える、リハビリテーション2030

東京開催（対面開催予定）

詳細は追ってお知らせいたします。皆様の一般演題発表、参加をお待ちしております。

編集後記

今回の記事を通し、災害時に医療は必要不可欠なものであると感じました。日本で災害が起きた際に、私たちにできることは何があるのか改めて考える機会を得ることができました。（渡邊健太）

日本国内で仕事をしているだけでは聞けないようなことを今回の記事で見ることができました。理学療法士は病院やクリニックなどで働くだけでなく、他の国の人々を助けることもできると学びました。（山田響己）

日本は世界的に災害が多い国であるため、災害時のリハビリの重要性を学ぶことができました。災害派遣医チームについても知ることができましたが、非常に興味深く遣り甲斐がある仕事であると感じました。（佐藤郁也）

事務局 編集担当

大西 海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）

長田 真弥（姉ヶ崎ケアセンター）

高橋 恵里（福島県立医科大学保健科学部）

ゲスト編集：佐藤郁也、山田響己、渡邊健太（仙台医健・スポーツ専門学校 理学療法科4年）

高橋 佳太郎（JICA海外協力隊候補者）

古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>

fit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/

【お問い合わせ】国際リハビリテーション研究会事務局 jsir.office@int-rehabil.jp

【JSIR HP】

